

## ①的障害者福祉総論

**課題:**支援における自己選択・自己決定の重要性について、あなたの体験を例に取り上げて述べなさい。

本レポートでは私自身が支援員として接していた利用者の、福祉サービスを移行していった過程と、そこで利用者の行った自己選択・自己決定について述べていく。

通所更生施設で出会った利用者 A は 30 代半ばの男性で、両親は既に他界しており、兄の家族と暮らしながら、前身である小規模作業所から含めて約 10 年間通い続けていた。通い始めた頃は、家庭における問題は無かったが、A の兄は仕事で家に居ることが少なく、A との折り合いが悪い義姉が家庭を任されており、家族の中で孤立している状態が続いていた。また同じ施設に長年通所しているため、変化の少ない日常に飽きつつあり、義姉の悪口や、施設に対する不満等、自分の置かれた環境への愚痴を周囲に漏らすようになっていった。

そういった状況でも、日中は更生施設に毎日通所していたが、帰宅後の外出が段々増えていき、更に月日が経つと、外出が深夜まで及び、義姉との喧嘩は掴みかかる、ひっかくといった暴力行為にまでエスカレートした為、施設の支援員が仲介に入り、A 本人と兄夫婦で、問題解決のために話し合いの機会を設けることとなった。

A は話し合いで、兄夫婦の保護下にある現在の生活に不満を述べ、別の場所で生活したいこと、また日中活動の場も 10 年同じ施設に通い飽きてきた為、友人が通うという小規模

作業所に行きたいという要望を出した。最初兄は自分に甘い A の性格から、自立に不安を感じていたが、話し合いを進めるうちに、兄も妻と A の関係も考慮して納得した為、施設支援員を通じ近隣の福祉サービス機関と話を進め、住居は同じ市内にあったグループホームを利用し、日中は A が興味を示していた小規模作業所へ通所という、本人が望んだ形への、生活環境へ移行することと決まる。希望する施設の受け入れ体制が整っていたこともあり、移行はとてもスムーズに進んだ。

我々の提供する福祉サービスから離れししばらく経ち、彼の現在の支援者に様子を聞くと、家庭で起こしたような暴力行為はなくなったが、自己管理の甘さから起こる、金銭の使い過ぎやケガ・病気等、課題は多いとのことだった。しかし地域イベント等で時々 A に会うことがあり、本人に近況を尋ねると、大変だけど今は楽しいといい、以前のように現状に対する愚痴や不満を漏らすような事はなくなっていた。A は現在も同じグループホーム、小規模作業所を利用し、生活している。

状況を聞く限りでは、環境の変化で新たな課題も生まれ、厳しい現実が続くと思われるが、自分が決断したという事実が A に与えた影響はとても大きく、周囲への愚痴や、暴力行為といった過去の問題は解決しており、また、A の大きな自身にも繋がり、現在の困難に立ち向かう支えとなっている様子も窺える。

ただし、兆候が出ていた段階で迅速な対応を行えず、問題行動まで発展してしまった事は、施設として今後の課題となった。

A は知人・友人から聞いた情報や、我々が提供した情報を元に、福祉サービスを自己選択・自己決定し、生活環境を移行した。福祉サービスの自己選択・自己決定は 2003 年施行の支援費制度での目的と意義であり、この一件は、この目的を体現する形となった。決定後の移行がスムーズだったのも、制度による環境の整備があったからこそであり、この問題が措置制度の時代に起こっていた場合、本人の満足する形で解決したかは難しいところである。

戦後、弱者の保護・救済を目的として始まり長く続いた、行政主導の措置制度は、ノーマライゼーションの福祉理念の浸透により時代にそぐわなくなっていく。そして時代の流れに沿う形で、利用者主体を目的とした支援費制

度は 2003 年にスタート、2006 年には障害者自立支援法として形を変えながらも、現在も流れは受け継がれている。しかし、すべての障害者が、自分の欲求を明確に表現して自己選択・自己決定出来るとは限らず、支援する側が必要と考えるサービスを提供していても、利用者が不満を抱え続けたり、利用者自身が不満の元がどこから発生しているのか気付いていなかったりする状況は決して珍しいものではない。A の一件では、最終的に利用するサービス機関の変更、生活環境の移行といった本人の将来に重大な影響を与える出来事となったが、そのような大きな決断だけに限らなくとも、利用者が本当に求めるものを引き出していき、利用者の意向に基づいたサービスを提供することが QOL を高めるための必要な行動である。その為にも、我々福祉サービスに従事する側は、利用者の発する様々な情報に耳を傾けることで、提供する支援が適切であるかを常に自問し続ける事が必要である。

**講評:**A さんの事例を丁寧に述べながら、「A さんが自分で決断したということが A さんが困難に立ち向かう大きな支えとなっているのではないか」という言葉が自己決定の重要性をとてよく示していると思いました。「利用者の情報に耳を傾けながら、提供する支援が適切であるかを常に問い続ける」という点もとても良いと思いました。本人を中心として支援が進むようになると、知的障害のある人への対応が色々と変わってきますね。